



『トクシマ・アンツアイガー』

第 21 号

徳島 1915 年 8 月 25 日

ポーランド

日本の新聞が伝えるところによれば、オーストリアの大公カール・シュテファンは、ポーランド王に即位してポーランド王国を新たに打ち立てる気になっているという。それどころか、ワルシャワ陥落後、新しい王がすぐにこの古い王都に入城すると言われている。われわれは、始めからこの情報の真実性を疑っていた。ポーランドの運命は、まだ決定されたわけではないと思うのだ。いくつかの特別な政治的事件が、即座の解決の助けになったというのなら話は別だが。これまでのところ、ドイツの情報源からは、この件に関してなんら報告はない。

ロシア領ポーランドの大部分がわが軍とオーストリア・ハンガリー軍に占領された今、ロシアのドゥーマ〔帝国議会〕は、ポーランド人により大きな政治的自由を認めるという決定を下した。同様の指示はすでに戦争の

はじめに布告されていたが、それはポーランドにおいてロシアの大義への好意的気運を醸成するためだった。けれども、ロシア軍の最高指揮官である大公ニコライ・ニコライェヴィッチによって、この布告は取り消された。ポーランドにロシアの力が及ばなくなりかけている瞬間になって、ロシアがポーランド人に同様の約束を繰り返すのは、われわれには芝居がかったポーズに思えてならない。

戦争が終われば、ポーランド問題とその解決は、非常に厄介な課題になることは明かだろう。われわれが講和締結後、新しい独立したポーランドを見ることになるのも、ほとんど疑いを入れなくてであろう。ポーランド問題は、ドイツ帝国に間接的にかかわりがあるだけでなく、われわれの国家にとってこの上なく重要である。というのも、300万人以上のポーランド人がドイツの国民であり、東部ドイツの少なからぬ部分、例えばポゼン州のいくつかの部分や南西シュレージエン、西プロイセンのいくつかの郡で、ポーランド人は住民の最も大きなパーセンテージを占めているからである。ドイツ領内のポーランド人はナショナリストであり、すなわち彼らは古いポーランド王国の再生に向けて努力している。われわれは、帝国のいくつかの部分がポーランド王国のためにドイツから分離することは問題外だと考えている。しかし、われわれのポーランド政策は、新しい独立したポーランドが建国されれば、これまでよりもいっそう複雑なものになるだろう。ポーランド人ナショナリストの共感は、オーストリアに強く向けられているようだ。これは、ポーランドを構成していた諸部分が、ポーランド分割のさいにそれを取り込んだ三つの国家において、いかに異なった扱いを受けたかを考えれば、きわめてもっともな事実である¹。ロシアは、この上なく野蛮な手段を用いて、ポーランド人をロシア人にしようと試みた。最もすぐれたポーランド人のうちの数千人がシベリアに追放された。

1 18世紀後半のポーランド分割にさいして、マリア・テレジアが息子の皇帝に「恥ずべきこと」として反対を唱えたこと、オーストリアが第二回分割に参加していないことなどをさすものか。

数千人は他の国々に避難所を求めなければならなかった。別の数千人は補償なしに財産を没収され、それはロシア人に与えられた。ロシア領ポーランドの社会的状況は、考えうるかぎり以最悪であり、最下層の人々にはほとんど権利も保護もない。

プロイセンは、時の経過とともに領内のポーランド人に対する政策を何度も変えてきた。全体的な動向は、東部国境地方をドイツの州にしようというものであり、政府の方針により、東部におけるドイツ人を強化するために幾多のことがなされた。ドイツの地図をよく見ればわかるだろうが、われわれの首都は東部国境にかなり近く、それゆえここにおいてスラヴ人に対する門をかけることが肝要である。ここで必要な優位をドイツ人に与えようとするプロイセンの努力によって、ポーランド人にとってきびしい事態が生じてしまったのは、無理もないことであった。それ以外の点では、ドイツのポーランド人たちは、もちろんだいたいのところわれわれと同じ政治的自由を享受し、われわれの社会的立法については無条件にわれわれと同じ恩恵を受けている。それゆえ、ドイツのポーランド人の社会的状態は、ロシア領ポーランドにおける彼らの同胞に比べてはるかによいものである。

オーストリアのポーランド人たちは、クラクフを中心とする西ガリツィアのザン川²まで居住している。ポーランド人たちは、ハプスブルク家の帝冠のもとで、何百年にもわたってこの国の他の少数民族と同じ政治的権利を享受し、この国のために彼らの側からたびたび大臣を出し、オーストリアの政策において重要な役割を演じている。彼らはここで、妨げられることなく彼ら自身の民族性を保つことができたが、それでも新しいポーランドを打ち立てるという願望を放棄することはなかった。

つづく

2 ヴァイクセル [ヴィスワ] 川に合流する川

日本の歴史（19）

この協定³に反して、中国は 1894 年の東学党の乱をきっかけに、日本への通告なしに朝鮮政府支援のため軍隊を派遣した。その結果、日本軍もソウル近郊の仁川に上陸した。これを受けて中国は、自軍がすでに事態を收拾したので、日本の介入は不必要であると声明した。これに対して日本は、天津条約を引き合いに出して、朝鮮の内政改革に対する共同の措置を提案した。中国は日本の提案をしりぞけ、海路で新しい部隊を送ってソウルにおける日本の戦力を殲滅しようとした。味方の軍を守るために日本の小艦隊が出港し、中国の上陸部隊を阻止しようとした。そして輸送船を一隻沈め、一隻拿捕することに成功した。この間、日本軍の増援部隊が上陸しており、それが今度は中国軍を攻撃し、打ち破った。それから日本軍は妨げられることなくソウルに入城した。この間中国軍は、ピョンヤン要塞に新しい戦力を集めていた。日本軍の一部が野津將軍の指揮下に進軍し、短期間でこの要塞を攻略した。二日後（9 月 17 日）、中国艦隊も海洋島付近で決定的な敗北を喫した⁴。この間、山県有朋元帥指揮下の別の部隊は鴨緑江を渡河し、10 月には九連城要塞を攻略した。それに続いて、日本の第二軍が遼東半島東岸の旅順港近くに上陸した。堅固な金州の陥落と旅順港の占領によって、日本軍はこの半島を手に入れた。ここから第二軍は二つに分かれた。そのひとつは満州にいた第一軍の一部と合流した。第二軍のもうひとつの部隊は、山東半島に渡って威海衛を攻撃した。中国艦隊は威海衛の港内で防備を固めていたが、日本陸軍の上陸をあえて阻止することはしていなかった。今や日本艦隊はこの港を封鎖した。陸軍部隊が要塞を攻撃している間、日本艦隊は水雷艇によるさまざまな攻撃をおこなったが、そ

3 1885 年 4 月に日清間で締結された天津条約。内容については前号参照。

4 いわゆる黄海の海戦で、旅順の東方百数十キロの海域でおこなわれた。なお、この記事と次号の「日本の歴史（22）」の中国の地名・人名の漢字表記などについては、荒武達朗氏のご教示をいただいた

のうちの4隻が犠牲になった。水陸からの繰り返される攻撃に、要塞は持ちこたえられなかった。中国艦隊司令長官丁〔汝昌〕提督は、要塞の降伏文書に署名したのちに自決した。北方軍の満州における進撃に、中国軍はもはやわずかしき抵抗しなかった。彼らは日本軍に対して勝利を得ることができないと感じたので、講和を求めた。講和は李鴻章により、1895年4月に下関で結ばれた。中国は朝鮮の独立を承認した。日本は遼東半島と台湾と澎湖列島を獲得し、中国のいくつかの港は日本との貿易のために開港され、最終的に中国は2億両（テール）の賠償金を支払った。講和条件履行の担保として、日本は威海衛を占領した。遼東半島の割譲に対し、ここをみずから獲得したいと望んでいたロシアが異議を唱えた。ドイツとフランスがロシア側についたので、日本はこの半島を中国に返還せざるをえなかった。半島の中国への返還の代償として、賠償金は3千万両（テール）上乗せされた。

つづく

コロネル沖海戦に関するフォン・シュペー伯爵の報告⁵

1914年11月1日

1914年11月1日のコロネル沖海戦の経過に関する、巡洋艦部隊司令官、海軍中将フォン・シュペー伯爵の報告は、1914年11月3日に書かれたものだが、ようやく最近宛先に届いた。そこには以下のように書かれている。

5 青島を根拠地としていたフォン・シュペー中将率いる巡洋艦部隊は、日本軍の青島攻撃を避けて太平洋を横断し、ドイツをめざした。1914年11月1日、チリのコロネル沖でほぼ同じ戦力のイギリス艦隊と遭遇してこれを破るが、12月8日、大西洋フォークランド沖でイギリスのより優勢な艦隊によって全滅した。なおこの艦隊から小型巡洋艦エムデンのみが別行動をとっており、インド洋で通商破壊戦をおこなった。

わが指揮下にある艦隊は、大型巡洋艦「シャルンホルスト」、「グナイゼナウ」と小型巡洋艦「ニュルンベルク」、「ドレースデン」、「ライプツィヒ」からなり、11月1日、時速14ノットでチリの沖合約20海里を南に航行していた。信頼すべき情報によると前夜コロネルに投錨していたイギリスの小型巡洋艦一隻を、迎え撃つためである。途中、遭遇する汽船や帆船を臨検するために、小型巡洋艦を側方に幾度か派遣した。

午後4時15分、帝国軍艦「ニュルンベルク」は北東に向かって行って見えなくなり、「ドレースデン」は約12海里後方にあった。私は、艦隊主力とともにアランコ湾の北約40海里にいた。

4時17分、西方に南方へ向かう二隻の船が、さらに4時25分、第三の船が約15海里離れたところに視認された。このうちの二隻は、まもなく軍艦、おそらくは「モンマス」と「グラスゴー」とわかった。一方、第三の船は補助巡洋艦「オトランド」であった。これらは皆、進路を南に取っていた。わが艦隊は全速力で追尾し、敵を右舷で約四斉射のあいだ捉えていた。風力6の風が南から吹き、潮流とうねりはそれ相応に強く、そのため私には風下に押し込められないことが肝要だった。また、わが方の選んだ進路は敵を中立国の海岸に近づけないことに役立った。4時35分頃、敵艦が西方に離れてゆくのが確認され、私は西南西にまで徐々に進路を変えて追跡した。そのさい、「シャルンホルスト」は22ノットで回頭しながらゆっくりと距離を縮め、一方「グナイゼナウ」と「ライプツィヒ」は遅れた。敵の活発な無線電信に対し、できるかぎりの妨害がなされた。

5時20分、もう一隻の軍艦の接近が報告された。5時30分、その艦が先頭に出て、クラドック少将の旗艦「グッド・ホープ」とみとめられた。敵の戦列は今や整い、檣頭旗を掲げ、南向きの進路でゆっくりと接近しようとした。5時35分からわが方は徐々に南西に向かい、のちに南に進路をとり、速度を下げた味方の艦が近づくのを待った。

6時、双方の戦列（「ニュルンベルク」は離れたところであり、「ドレースデン」はまだこの船の1海里後方にあった）は13.5kmの距離をおいて

並航しながら南進し、接近しつつあった。6 時 20 分、私は 12.4km の距離で第一斉射のための砲塔回転を命じ、午後 6 時 34 分、10.4km の距離で砲火を開いた。風と潮流は前方から向かってきて、艦は激浪に逆らって力強く進んだ。特に両側にいた小型巡洋艦はそうで、偵察と距離測定は波浪のため非常に困難だった。波は船首楼と司令塔にぶつかってきて、高いうねりが中甲板にある 10.5 センチ副砲から目標を隠してしまったので、これらの砲からは敵艦の艦が全然見えないか、時折しか見えなかった。

つづく

コンサート

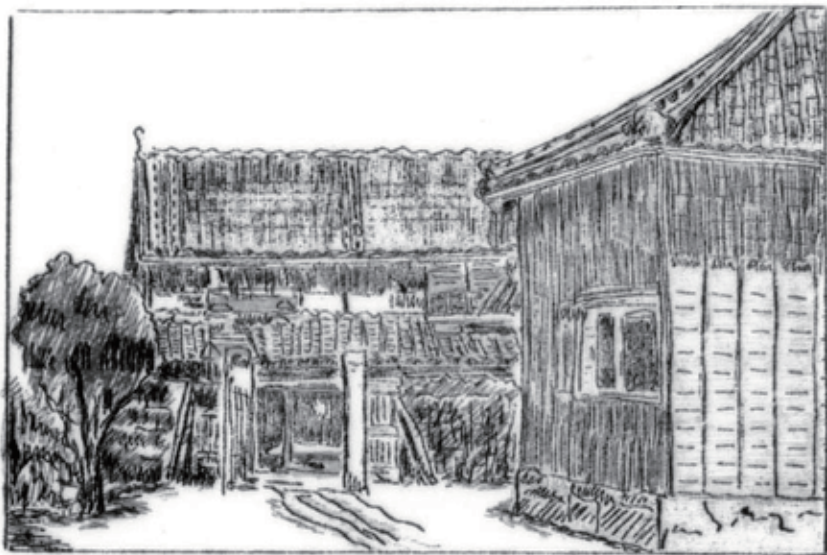
本日のコンサート・プログラム

- | | |
|--------------------------|----------|
| 1) 『故郷の歌による行進曲』 | リンデマン |
| 2) 歌劇『ローエングリン』より「花嫁への合唱」 | R. ワーグナー |
| 3) バレエ『人形の精』より「大幻想曲」 | J. バイアー |
| 4) 『君の心で夢見させてほしい』 歌 | クラージンスキー |
| 5) 『赤い羽根』 インディアン間奏曲 | ケリー・ミルズ |

スポーツ

われわれのスポーツ週間に、今まで 27 名の参加希望の申し込みがあった。彼らは全部で 97 種目に参加することになる。陸上競技の全 9 種目には、今のところ 4 名しかわれわれのリストに上がっていない。

その他、サッカーの 3 チームとファウストバルの 4 チームが登録されている。内訳は以下の通り。



収容所の情景

その4

サッカー第1チーム

ブロンナー、ハイアー二等兵曹、シュミッツ、ヴェーバー J、レーヴェン、カイク、レンケル一等兵曹、ハイアーマン、ナスート二等兵曹、ヘーネッケ、グリュネヴェラー。

サッカー第2チーム

カンプチェク、バンティーン、ヒューブナー、カウフマンズ、シュターフェン、ケルナー、カンドウルスキー、ショルン、モンゼース、ライポルト、
フライ

サッカー第3チーム

ヴァイゼ、ラギーゼ、クルツケ、クヴァールト、クノープ、ブライトバハ、ハウン、ヴェーバー jr、グレーフェ、キアドルフ、ローデ

ファウストバル第1チーム

シュテューベン一等兵曹、レンケル一等兵曹、グレーニング一等兵曹、
エーベルツ二等兵曹、パウアー

ファウストバル第2チーム

ハインツェル二等兵曹、ナースト二等兵曹、ハイアー二等兵曹、
クランツ二等兵曹、レーヴェン

ファウストバル第3チーム

カンブチェク、カウマンズ、ヒューブナー、シュテーフェンス、
モンゼース

ファウストバル第4チーム

ザウアー、クノープ、クロイツ、ロイター、ヘーネック

すでに 20 日には最初ファウストバルの試合が、第3チームと第4チームのあいだでおこなわれ、第4チームが 145 対 123 で勝ち上がった。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 35 問解答

- 1) Tc8 - f8 任意の手
2) D, S, L で詰み

第 36 問解答

- 1) Dc1 - c2 Ta4 - a7+
2) Kb7 x a7 任意の手
3) D, S で詰み

第 36 問その他の解答

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1) Te8 - b8 + | 1) Sa8 - b6 |
| 2) Kb7 x b8 任意の手 | 2) Sc6 - b4+ Ta4 x b4 |
| 3) D, S, L で詰み | 3) Dc2 - c6 で詰み |
| 1) Sa8 - c7 | |
| 2) Sc6 - e7+ Te8 x e7 | |
| 3. Dcl - c6 詰み | |

正解者は、ヴェーバー J.、H. ローデ

第 37 問 白：Ke4, Da8, Tc5,d7, Le5, Sb4,c4, Bb2, e7

黒：Kb1, Tc6, Ld6, Bb3, e3

2 手詰め

第 38 問 白：Kf4, Da2, Ld5, Bb2

黒：Kd4, Lf1, Be5, f5

3 手詰め

図書室

最近東京援助委員会からかなりの本が届き、別の方面からも新しい本が送られてきたので、われわれは今日、図書室に 33 冊のドイツ語の新しい本と若干の英語の本を加えることができた。さらに、『ヴォッヒェ（週間）』『デア・テュルマー（塔守）』『メルツ（3 月）』『ハイマート・ウント・ヴェルト（故郷と世界）』のような雑誌の相当の部数が届いた。

われわれの蔵書は、今や 280 冊のドイツ語の本とかなりの量の外国語の著作からなっている。

投稿欄

競争相手の二国 食塩の製造量において、ドイツはたしかにアメリカに凌駕されている。けれどもそれは、過剰生産を避けるため、ドイツが産出量を需要に合わせているという理由だけによるのである。塩全般ということであれば、つまりカリ塩も含めば、ドイツは断然一位である。われわれの見解によれば、ドイツも最大級の岩塩鉱をいくつか持っており、それはシュタスフルト周辺にある。今は参考資料がないので、残念ながらこのことをつぶさに確証することはできない。もしかすると、読者の中の誰かが、われわれの望んでいる情報を教えてくれるかもしれない。

「エムデン」上陸隊体験記（7）

突然目の前に一条の光線がきらめいた。銃弾がわれわれの頭上を飛んでいる。下のラクダ隊の方から「散兵線を作れ」と声が聞こえる。ここではすぐに夜が明けることを、彼らは知っているのだ。砂丘の周囲全体が占拠されていた。では、銃剣を装着だ。……敵は逃げたが、またやってきた。今度は四方八方から。われわれに随伴しているトルコ人憲兵たちの数人が負傷している。機関銃手のラーデマッハーが心臓を撃たれて死んだ。もうひとりの負傷者が出たが、それは夜の見張りをしていたシュミット少尉で、瀕死の重傷である。胸を撃たれて肺が傷ついていたのだ。

突然敵が白い布を振った。われわれのラクダの一部の所有者である族長が交渉のために向こう側に行き、サーミ・ベイとその妻もあとにつづいた。その間、われわれは一種の車陣をすばやく築いた。ラクダの鞍、米とジャガイモの袋（そのすべてに砂を詰めた）による円陣である。シャベルがなかったので、銃剣と皿と手を使って砂を掘らなければならなかった。この「城壁」全体は、直径 50 メートルほどのものであった。その背後に塹壕を掘ったが、戦いの最中になお、われわれはそれをさらに深くしていた。ラクダたちは内側に横たわらせたが、塹壕の背後を守るためにとても役に立った。それから内側の壁も作られ、そのうしろに病人たちを運び込んだ。真ん中には渴きをしのぐために瓶 2 本分の水を埋めた。その他、石油缶 10 個分の水があったが、全部で 4 日分であった。晩遅くなって、サーミの妻が無駄に終わった交渉から帰ってきた。ひとりでだ。彼女はこの戦闘の日にはじめて、そして一度だけヴェールを上げて、弾薬筒を配り、非の打ちどころのないふるまいを示していた。

まもなく敵の数が確認できた。ほぼ 300 人で、わが方は 50 人、29 丁の銃である。夜、シュミット少尉が死んだ。彼を陣営の真ん中に葬った。墓穴を手と銃剣で掘らねばならず、死体を守るために、その上のあらゆる痕跡を消さなければならなかった。ラーデマッハーは、戦いの後すぐに埋

葬されていた。二人ともひっそりと、しかし榮譽に包まれて。

負傷者たちは難儀な目にあった。医療箱は難破のときに失われていて、残っていたのは救急用包帯セットだけであり、カテーテルもはさみもなかった。次の日、兵士たちが乾いた舌で熱に浮かされたように叫んでいた。「水、水！」しかし、各人は日に三度、小さな盃一杯の水しかももらえなかった。水がなくなったら、われわれは円陣から出て血路を開かなければならなかった。そうすれば、われわれは優勢な敵のためにつぶされていただろう。アラブ人の憲兵たちは、あっさりとラクダの首を切って、胃の中の黄色い水を飲んだ。連中はどんなことでも耐えられるのだ。夜のあいだずっと、われわれは、防御に利用され、弾に当たって死んだラクダの死骸を運び出した。すると、その死骸をねらうハイエナたちが近づいてきた。私はその一頭を撃ち殺したが、暗闇の中で敵と見誤ったためである。

こうして三日が過ぎ、三日目に新しい交渉があった。今度はベドウィンたちはもう武器を要求せず、金だけを求めた。今回の話し合いは城壁越しにおこなわれた。私が拒絶すると、ベドウィンは言った。「タクサン、戦イ。」私は言った。「望むところだ。」われわれにはもうわずかな弾薬しかなく、水はほとんどなかった。実際、今度ばかりはもうおしまいかと思われた。気分はかなり重かった。朝十時頃、突然北の方から二人のラクダ騎兵が出現し、白い布を振った。まもなく同じ方向から、ずっと離れて長い列のラクダ部隊が約百騎現れた。彼らは急速に近づいてきて、歌いながら絵のように見事な隊列を作ってこちらに向かってきた。これは、メッカのエミールからの使者と部隊であった。

サーミ・ベイの妻が、最初の交渉の最中に、ジッダ出身のアラブ人の若者を派遣していたのだった。ジッダの総督は、それを受けてエミールに電話してくれた。そしてエミールは、すぐにラクダ部隊に彼の二人の息子と侍医をつけてよこしたというわけだ。年長の息子アブダッラーが交渉をおこない、侍医がフランス語で仲介してくれた。いまや一人、二人と盗賊たちは立ち去り、最後には皆いなくなった。

つづく

バイエルン砲兵の歌

「きれいな庭は何の足しにもならぬ」のメロディーで

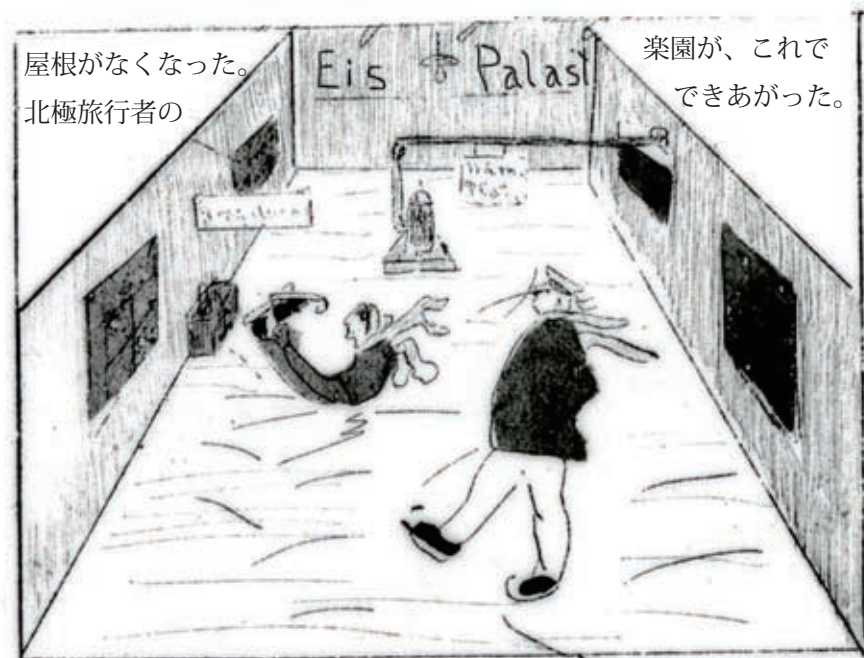
おれたち砲兵はいかした仲間だ。
まるで遠慮会釈を知らない。
おれたちは堅い砲弾でノックする。
するとどんな頑丈な扉も開く。
フランスへずんずん入ってゆく。
おれが何を思っているかって？
おれが何を喜びにしてるかって？

王様がやってきて言う。おい君、
射撃は上々。諸君なかなかやりおる。
そう、おれは砲兵どもを知っている。
やつらは熱い大砲が大好きだ。
そうして冷たい墓を恐れない。
おれが何を思っているかって？
おお娘さんよ、遠くの故郷で
きれいな目を赤く泣きはらすな。
それは星のような目にもったいない。
おれはまだ元気でぴんぴんしてる。
君を思うと心臓がどきどきするんだ。
おれが何を思っているかって？

ユリウス・クライスの『青春』より



バラックの43人の兵隊が、冬用の新しい宿舎を求めている。
本来の部屋に余裕がなく別のことに使われるためである。



入浴のこと

晩方、クーノベルトは思う。

こんなときの入浴はいいじゃないか。

そこで彼は楽しい気持ちで

暗がりの中、浴場へと急ぐ。

そこで湯を使って思うさま

体をしっかり洗うのだ。

諸君も皆知っているだろうが、

入浴は 10 時まで許されている。

しかし、風呂の入り方には二つある。

だから、正しい入り方を聞くがよい。



まずは手桶を持ってはいること、
それから習わし通り石鹸で体を洗い
そのあと水で洗い流すなら、
それはまっとうで、好ましいことだ。
だが、翌日たらいでからだを
洗えるようにしようと、
あらかじめ湯船にぎりぎり
いっぱい湯を入れたことがある。
そこで困り者の御仁が前の日のうちに
風呂にとびこんだら、怒られる。
それは、諸君らにお願いだが、第一に
禁止だし、第二に習わしでもないから。
やってもよいと思うやつがいたら、
そのうちに皆が同じことをして、
こんなむちゃくちゃなことが
本当に度を越したものになってしまう。
ところで、この一件を現行犯で
見た人々がいたのはよいことだ。
そのことでともかく悪行をうまく
明るみに出すことはできるから。
二回もやったら十分じゃないか。
水浴なら池でだってできる。

今や警告が必要になったと
思いたい。仲間内からの警告が。
でないと天のご意志が力をふるって
すぐさま秩序がもたらされよう。

カールとフィトゲ

カール： フィディ、君もベッドを持ってるのか。

フィトゲ： いや、カール、ベッドはいらないよ。

カール： なぜだい。

フィトゲ： まあ聞いてくれ。まず、毎朝塵やごみをマットレスの下
へ掃き込む必要がない。それから、この蟻どもを見て、思う
んだ。おれはポーランドの宿営にいて、まだこういう種類の
ロシア軍の侵入を受けているんだとね。

